

助成番号：257

## 第6回国際農業経営学会に出席して

永木正和

畜産経営学科酪農経営学研究室

### 1. 海外研修の目的

第6回国際農業経営学会への参加およびミシガン大学、イリノイ大学との研究交流

### 2. 研修期間

昭和62年6月25日～7月15日

### 3. 研修国、場所

アメリカ合衆国

- ① ミネアポリス市内およびミネソタ大学
- ② ミシガン州立大学（イースト・ランシング市）
- ③ イリノイ大学（シャンペーン市）

### 4. 国際農業経営学会

今回、帯広畜産大学後援会の援助を得て、学会参加と研究交流を目的とする海外研修の機会を得た。研究交流は、伝統的な加工乳供給地帯であり、アメリカでは典型的な草地型酪農経営を展開している地帯の酪農の実態を観察すること、そして酪農関連の進んだコンピュータ情報処理システム（人工知能システム）の研究開発の動向を調査することであったが、こちらの方面のレポートは他の機会に譲る。

国際農業経営学会は、International Farm Management Association (IFMA) が3年に1度の割合で、農業生産や農業経営の専門家、実務家に呼びかけて、世界各地で研究成果や各国の農業事情について交流し合う国際会議である。今回が第6回大会であるので学会の歴史は古くないが、アメリカでの開催という地の利もあって、本大会は40か国から700名もが参加する大規模なものであった。

国際農業経営学会は、農業生産と経営が中心的な討議テーマであるので、国際的な農産物貿易や「経済体制」のような国間で論争になるような議題は少ないこと、また、研究者のみならず、農業の指導機関（農協や営農コンサルタント会社 etc.）、農業関連企業、それに行政官までの幅広い実務家が参加していたことで、各国の農業事情を踏まえた活発な討論がなされました。よくありがちな壇上からの一方通行ではなく、レポーターとオーディアンスの相互交流があった。大きな大会ではあ

ったが、実際的で、経験を交えた質疑応答は、堅苦しさをほぐしてくれるばかりでなく、ちょっとオーバーな表現だが、農業経営学会らしく、アカデミズムとプラグマティズムの調和した理想的な会議であった。もっとも、過去の学会の雰囲気はわからないが、アメリカ流の農業経営学思想が色濃く反映されていたのは確かであろう。

学会はミネソタ大学が主催大学となり、ミネアポリス市内の一流ホテルを会場にして6月29日から7月14日までの1週間開催された。今大会の討議テーマは「農業経営の実際—今後の食料システムをどう運営するか—」で、2日目にまず「国際的な農業経営の経済環境」と題してカントリー・レポートがあった。基調報告は、4日目に「資源開発」、5日目に「農業開発の将来」、6日目に「貿易、援助、そして生産」と題して、いずれも午前中に企画された。それ以外の時間に分科会および1日コースの農家視察があった。また、期間中4日は、参加者全員が朝食を共にしながら、著名な先生、USDA 高等行政官の講演に耳を傾け、夜は会場で、あるいはミシシッピー川の外輪船上のディナー・パーティ、ディナー・ショーに招待された。まさに期間中は24時間参加していたようなものであったが、早朝から夕刻までの講演や討議へのコンセントレーションと、夜のリラクゼーションがうまく組み合わされた会議運営であった。

基調講演では、個人的な感想としてだが、ミネソタ大学のルタン教授の「将来の農業発展」および世界銀行のシュー氏の「貿易、援助、生産制限」が強く印象に残る。ルタン教授の講演は、これまでの農業技術進歩は相対価格の変化によって誘発されてきたが、価格が政策的に操作されていたため、技術進歩は、反面、需給のアンバランスを生み出したとし、今後は研究開発によって技術進歩を誘発すべきこと、また、その場合、機械技術の進歩は大規模農業国のみにも有益であって、発展途上国にも研究開発の使益をシェアするためにはバイオテクノロジーの分野での研究を強力に推進すべきであると結んだ。

シュー氏は、かつては余剰農産物が途上国援助に向けられることで、世界の農産物需給バランスが維持されていたが、現在は農産物を輸出できる国（日本を例外として）が農産物を輸入できる国となり、世界的に食糧は増産してきているが、国間の食糧需給アンバランスはむしろ高まってきていると指摘し、これは農産物貿易市場の寡占化の進行によるものであるとし、国際的に食糧需給を調整する機関の必要性、貿易収支を資本収支や為替相場によって調整する政策機能の強化を訴えた。

分科会では、アメリカの報告者から、近年の農業不況のため、地価が数年前までエーカー当り3,000ドルしていたのが800ドルにまで急落し、離農が進む反面、大型企業経営が増大してきていること、その背後に農地が非農業資産家の投資の対象になっていること、民間の農地信託会社、営農コンサルタント会社が出現している事情が報告された。アメリカ農業は、伝統的な家族経営から企業的経営へと変容しつつあることを印象づけられた。

コンピュータ利用のセッションでは、私は総括コメントに指命されていたので、我国の動向を踏まえたコメントをした。現在は各国とも、パソコンのスタンド・アロン型利用の段階で、広域的・組織的な利用（ネットワーク利用）はまだまだ進展していないようであったが、社会主義国や発展途上国でもプランニングや経営指導に積極的に活用されていた。イギリスやアメリカは民間のソフト会社がソフトを売り、また情報処理サービスをしていて、社会主義国、発展途上国とは異なる発展をしているし、大学等の研究機関は人工知能の応用研究段階に移行していた。これらの点は、私がかつてアメリカに滞在していた1970年代末期とは様相を一変していた。

分科会は小人数の専門家の参加でもあり、討論は活発であった。同じテーマのセッションが異な

る時間帯で2回開催されて、より多くの大会参加者が出席できるように工夫されていた。私にとって、国際学会へのフル・タイム参加は初めてのことであったが、まさに1週間寝食を共にして参加者と交流していたので、いつの間にか全員が一家族のように打ち解け合えて、閉会式後は別れをおしみ、3年後の再会を確かめ合う挨拶に半日を費したほどであった。私にとっては、ミネソタ大学はかつて2年間お世話になった場所でもあり、大学の旧知との出会いもなつかしかった。有意義であり、かつ楽しい大会参加ができた。